

中国農村における留守児童の夢と社会的支援に関する一考察（その2）

登坂 学

Consideration of Social Support and Dreams of Left-Behind Children
in Chinese Agricultural Villages: Part 2

Manabu TOSAKA

Abstract

This study examines and elucidates how ambitions of left-behind children in poor agricultural villages can be fulfilled in Chinese society. Chapter 2 verifies important government documents and considers the effect of Chinese educational reforms on the self-actualization of left-behind children and migrant workers over the next decade. Chapter 3 examines the current state of life and the aspirations of left-behind children from their perspective, based on a survey conducted in an agricultural village in Hunan Province, which for the past three years has been the focus of participant observation. Chapter 4 introduces and considers the significance of social care being implemented to achieve the aspirations of left-behind children in Xinhua prefecture, Hunan province as well as of the hometown migrant workers and their children, based on the survey results of agricultural villages.

Key words : Harmonious society Left-behind children Migrant worker Hunan Province
Participant observation Private volunteer organization

キーワード : 和諧社会 留守児童 外来建設者 湖南省 参与観察 民間ボランティア団体

1. はじめに

前々稿及び前稿において、冒頭「^{チーホイニューハイ}智慧女孩」(智慧ちゃん)というニックネームを持つ少女の歌うフォークソングを紹介してきた¹⁾。この少女はインターネットのブログや動画サイトを拠点にギターの弾き語りを公開しているシンガーソングライターである。彼女の歌は留守児童の生活状況や心情を代弁するものであり、ユーザーから多大な反響と共感が寄せられているのであった。前稿発表ののち、智慧ちゃんが留守児童の気持ちを代弁する新曲をもう一曲公開したので、本稿冒頭で紹介したい。それは“六・一児童節”(子どもの日)のために作られた「学校は私たちの家」²⁾と題する曲である(資料1参照。原題「学校就是我们的家」、作詞:張結林、作曲:智慧女孩)。

【資料1】

爹妈打工闯天下 (父さんと母さんは出稼ぎで頑張ってるの)
爷爷奶奶年纪大 (おじいちゃんとおばあちゃんはもうお年寄り)
我们成了留守儿童 (私たちは留守児童になりました)
学校就是我们的家 (学校が私たちのおうち)
爹妈打工闯天下 (お父ちゃんとお母ちゃんは出稼ぎで奮闘中)
爷爷奶奶年纪大 (おじいちゃんとおばあちゃんはもうお年寄り)
我们这些留守儿童 (私たち留守番の子どもには)
老师就是爹和妈 (先生が父さんと母さんなの)

我亲爱的老师啊! (大好きな先生!)
教我们学文化 (私たちにべんきょうを教えて)
我们亲爱的老师啊! (大好きな先生!)
和我们一起玩耍 (私たちと一緒に遊んで)

我们亲爱的老师啊！（私たちの大好きな先生！）
 陪我们说悄悄话（私たちとナイショ話をして）
 我亲爱的老师啊！（大好きな先生！）
 是我们的爹和妈（あなたは私たちの父さんと母さん）
 学校就是我们的家（学校が私たちのおうち）

哦 亲爱的老师（ああ 大好きな先生）
 给我阳光温暖（私にお日さまの暖かさをちょうだい）
 亲爱的老师（大好きな先生）
 给我月儿光华（私にお月さまの輝きをちょうだい）
 哦 亲爱的老师（ああ 大好きな先生）
 给我阳光温暖（私にお日さまの暖かさをちょうだい）
 学校就是我们的家（学校が私たちのおうち）
 学校就是我们的家（学校が私たちのおうち）

智慧ちゃんが歌うのは、留守児童たちが抱く寂しさや優しい先生を慕う純朴な思いである。子どもたちにとって、常に傍らにいて親代わりに自分を見守ってくれる先生や大人の存在は、極めて大きなものなのである。

筆者自身、このような留守児童を教導する教師や教育現場、そして地域社会における取り組みの重要性については注目しており、すでにこれまでの論文の中でも言及し、実践事例の一端を紹介してきたところである。しかし留守児童の問題について論じすでに数年を経た現在、なおもこのような子どもたちをめぐる議論が中国国内において止まない現在、新たな取り組みがどのようになされたのか、新たな考え方や方向性は採用されたのか等について、継続的に事例収集と検証を行われなければならないと考える。

本稿ではこのような観点から、次節「2」においてはまず中央政府の政府工作報告の検証をつうじて直近の教育における不平等は正政策の成果及び今後の計画を明らかにする。国家として社会的弱者の人生と夢をどのようにとらえ、その実現を支援しようとしているのか方向性を見るためである。さらに「3」節では湖南省貧困農村地域で行ったフィールドワークのうち、未整理・未発表のアンケート結果をもとに、小論の主要テーマである「留守児童の夢」を今一度検証する。それを踏まえて「4」節では、当該地域で行われている大学生を中心とする若い世代によるボランティア活動進等の先進的取り組み事例を取り上げ検証していく。両親に代わって留守児童たちの心の支えとなる教員は、同時に留守児童が夢を実現する「サポーター」なのであり、そこに熱意溢れる若い教師たちが果たす役割は

大きいと考えるからである。

2. 政府の取り組み

2-1 2012 年「政府工作報告」より

フィールドワークで得られた材料を検証する前に、中国における教育面の取り組みをマクロ的視野で検証したい。ここでは 2012 年及び 13 年の「中国政府工作報告」を比較・検証してみよう。このようにすれば、ここ数年の教育行政の大きな流れと微妙な変化が把握できると思料するからである。まず 2011 年の主要成果からみてみよう。注意すべきところには下線を施していく。

【資料2】

教育の公平を着実に推進した。教育改革・発展計画要綱を深く貫徹し、実施した。25 年にわたる弛まぬ努力により、九年制義務教育を全面的に達成した。3000 万人余りの農村の寄宿生の費用が免除され、そのうち、中・西部地区における貧困家庭の生徒 1228 万人が生活補助金を受けた。貧困家庭の生徒向けの学資援助体系が整えられた。農民工に随伴して都市部に移ってきた子供たちが現地で義務教育を受けるという問題が初歩的に解決された。「就学前教育三ヵ年行動計画」の実施を推進したことで、幼児の入園率が高まった。職業教育の発展に力を入れた。小・中・高校においては教員の養成・研修を強化し、教員職務制度改革のモデル事業を拡充させることによって、教師陣全般の資質を高めた。学費免除型の第一期師範大学卒業生全員が小・中・高校の教員となり、そのうちの九割以上が中・西部地区で勤務している。³⁾

筆者がこれまで追究してきたテーマである「留守児童」ならびに「都市における農村出身児童の教育」に関連して言えば、上記下線を施した部分がとくに重要となる。冒頭の書き出しが「教育の公平」となっていることから、政府は教育改革においても「格差縮小」を最重要視し、政策の中心軸としていることが見て取れる。それに続く実績の総括では、具体的数値を提示しつつ、やはり貧困層や農村出身者等、社会的弱者の教育面の機会平等に配慮する成果を PR する内容となっている。ただし上記の記述は次に掲げる 2013 年工作報告に比べると簡素である。

2-2 2013 年「政府工作報告」より

2013 年の政府工作報告では次のような記述がなされている。

【資料3】

教育事業を優先的に発展させた。国家財政による教育関連の支出は5年間累計で7兆7900億元、年平均21.58%の伸び率となり、2012年度には対GDP比が4%に達した。教育資源が農村や辺境地区、民族地区、貧困地区へ重点的に傾斜配分され、教育分野の公平度が著しく高まった。都市・農村における9年制義務教育の無償化を全面的に実現したことで、1億6000万人の児童・生徒がそのメリットを受けた。就学前教育3カ年行動計画の実施により、「入園難」の問題がいくらか緩和された。国の学資援助制度の整備が間断なく進められた結果、困窮家庭の児童・生徒・学生向けの援助システムが確立し、その適用範囲が就学前教育から大学院教育までの全段階に広がり、各年度の援助の規模が約1000億元、援助受給者の数が延べ8000万人近くとなった。中等職業教育の学費免除政策を実施し、農村出身の生徒や都市出身の農業関連専攻の生徒、困窮家庭の生徒をすべて適用対象枠に組み入れた。出稼ぎ労働者に随伴して都市部に移ってきた子供たちが滞在先で義務教育を受けられるようにするという問題がひとまず解決され、現時点で農村戸籍の児童1260万人が都市部で義務教育を受けている。義務教育段階の農村生徒3000万人余りを対象とする栄養改善計画を実施した。小中学校・高校の校舎安全プロジェクトを完了させた。職業教育の基礎能力と特殊教育の基盤施設の整備を速めた。義務教育の学校で業績給制を実施し、教育部直属の師範大学で師範コースの学生向けの学費免除政策を導入し、農村教師陣の強化に取り組んだ。教育の質と水準を全面的に引き上げた結果、高等教育の粗入学率が30%に高まった。国民の教育水準が大幅に向上し、15歳以上の国民の平均就学年数が9年以上となった。⁴⁾

ここでは個々の数値の信用性や統計上の手続きの厳密さはさておき、報告の形式上の変化に注目することが必要である。まず、記述の分量が前年の2倍になっているところに注目したい。工作報告においてどのような項目にどれだけの記述量が割かれるかは、その問題を政府がどれだけ重視しているかを測る目安になると考えられるからである。

次に、教育関連の支出が対GDP比4%になったことについては、我が国のそれにおける公財政支出が3.6%、私費負担を合わせてもようやく5.2%であるのを考えれば、相当額の増加であると考えられる（ちなみに1位はデンマークの7.5%である）⁵⁾。

その他、下線を施した各実績について本節で詳細に言及・検討することはできないが、いずれも本稿の中心テーマである教育の格差是正に関わってくる部分であるため注意する必要がある。その数値の根拠はとも

かくも、教育における格差是正を重視しており、その成果を政府が懸命にPRしようとしていることは見て取れるだろう。

3. 湖南省新化县B鎮におけるフィールドワークから

3-1 3回目のフィールドワーク

1) ホストファミリーの近況

貧困農村地域における3年目（3回目）のフィールドワークを2011年12月下旬から2012年1月上旬にかけて実施した。過去2回と同様に現地協力者のF氏宅にホームステイをすることになった。開始に先立って中国の法令に則り、地元公安派出所に出向いてパスポートのコピーと名刺を添えて滞在申請を行った。警察官からは身分や所属、滞在の目的や期間等幾つか質問をされたが、特に問題なく許可を受けることができた。

この一年間のブランクに、F氏一家には第二子（長男）が生まれた。筆者は渡航直前になってこのことを知り、当初の旅程を少々変更、農村入りの日を少し遅らせ、長沙市（省都）及び新化県の「県城」（新化県政府の所在地）において、F氏と子どもたちへのお土産を見繕った（これはもちろん私費である）。このような場合、中国、とりわけ農村部においては、祝意を贈り物に託して送るのが習慣であり、経済的に優位にある者の器量でもある。もちろん研究上の便宜を図ってもらうことを抜きにしても、ずっとお世話になっている現地協力者の家族には愛着があり、心からお祝いしたかったからである。

F氏の家は、我が国における子育て中の家庭と同様に大変にぎやかで、すべてが子どもを中心に動いていた。筆者も滞在中はずっと子どもの遊び相手となっていたのである。2人の子どもがまだ幼いため、母親（F氏の娘）と父親（義理の息子）はF氏の家に留まり、地元で左官業に従事している。つまりF氏の孫たちは留守児童ではない。「出稼ぎの里」といっても、子どもが小さく手のかかるうちは家を離れず地元で働くケースが多いのである。この点にF氏家族の教育的配慮をみることができる。ただし娘夫婦曰く、「子どもが成長したら子育てを母（子どもから見れば祖母）に託して稼ぎの良い外地で出稼ぎをすることは厭わない。すべては子どもと家族の幸せのため」とのことである。

筆者の滞在中、出稼ぎ中のF氏の息子A君も折よく帰省中であった。広東省深圳市にあるハイテク電子部品工場で働くA君は、春節の大混雑を避け、一足早く

12月下旬に里帰りしていたのである。二十歳を過ぎた息子に対して、F氏は早く真剣に結婚を考えるよう促していた。その矛先は筆者にも向かい、「早く相手を見つけて今度はここに連れてくるように」と要望されたのが印象的である。与太話に聞こえるかもしれないが、このような日常的な会話のなかにも中国農民の典型的な思考がみえてくるのが興味深い。

この一年でF氏の事業はまた少し発展し、暮らし向きも少し良くなった。F氏は資金を貯めてダンプカーを購入、彼自身が運転手となり、建設資材の調達及び運送の仕事をするようになったのである。出稼ぎ仕送り収入で好景気に沸く村は新居の建設ラッシュが続き、F氏の現金収入も少しアップしていた。



【図1】 第二子（長男）が誕生。購入した2台のパソコンの前で孫（長男）を抱くF氏。2011年中に当村でもADSL回線が使用可能となった。



【図2】 前回フィールドワークではまだ小さかった第一子（長女）が歩くようになった。こたつにあたっている。

2) 農村における継続的な「留守児童」との交流

第一回のフィールドワークにおいては、F氏に紹介された留守児童（及び経済困窮家庭の子ども）の生活及び就学状況の把握を目的に面談を実施したのであった。その中で最も状況が深刻だったのがWさんであっ

た。現在小学校5年生であるこの少女は父母を亡くし、現在は祖父母に養われている。

その状況に変化はなかった。健康に不安があり、現金収入の乏しい祖父母は、小学校における諸経費（授業料は無料だがそれ以外にも経費を徴収される）の捻出に悩んでいるのである。小学校はなんとか出られたとしても、このままでは中学校への進学を断念しなければならない可能性がある。前回同様、おじいさんは現在の窮状を切々と語り、おばあさんは状況を語るうちに泣き出してしまった。Wさんの将来のことを考えると泣かずにはいられないのである。F氏と相談のうえ、筆者は当面の必要経費として、ある程度の寄付をすることとなった。

国家政策によって義務教育無償化が実現したはずの現在にあって、その実このような子どもは数多く存在するのである。新聞紙上には地方政府やNGO及び篤志家の経済的支援を得て進学の夢を実現したケースが大々的に報じられるが、現実にはWさんのような子どもも多い。参与観察者としてこの地域に入り、多少なりとも村の方々と繋がりのできた筆者にとって、大変つらい問題である。今後筆者自身がどのように行動すべきか、真剣に考えなければならない事項でもある。

3-2 近隣のB鎮中心小学校における調査より

前稿では山岳僻地の小学校（小学校低学年児及び幼稚園児のみを預かる「不完全小学校」）における結果のみを提示・分析した。本稿においては前回提示・分析できなかったB鎮中心小学（鎮中心部の1年生から6年生までが学ぶ完全小学校）における調査結果を開示し、その分析を試みる。なお本調査は2回目のフィールドワーク時（11年1月上旬）に、湖南省新化县B鎮において実施された。筆者及び現地協力者のF氏がB鎮中心小学（中学校も併設）を訪問し、F氏の親戚である小学教師にアンケート実施の協力を依頼した。小学校教師は授業時間及び課外時間を使用して子どもたちにアンケートを実施してくれたのである。質問項目は前稿同様であるが、次のとおり縮小コピーし再掲示する。（資料4参照、紙幅の関係で和訳のみ掲載する）

【資料4】

農村小学生に対する質問票調査

このたびの質問票調査はすべて匿名回答とし、知りえた内容は学術論文の執筆に使用するのみであり、絶対にその他の目的に使用しないことを、私（登坂学）はここに宣誓いたします。

○内には✓印を、() 内には語句の記入をお願いします。

- 1 あなたは ○男子 ○女子
- 2 あなたは何歳ですか？ () 歳
- 3 あなたは何年生ですか？ () 年生
- 4 あなたは何人家族ですか () 人家族
- 5 兄弟姉妹は何人いますか？ () 人
- 6 あなたの家族構成は？
() () () () () ()
- 7 今年あなたのお父さんやお母さんは出稼ぎに行きましたか？
○二人とも出た。
○お父さんが出た。
○お母さんが出た。
○出ていない。二人とも家にいる。
- 8 お父さんやお母さんが出稼ぎに行くと、何カ月（何年）に一度帰省しますか？
() カ月に一度帰省する。
() 年に一度帰省する。
- 9 お父さんやお母さんが出稼ぎで家にいないとき、誰があなたの面倒を見てくれますか？
○おじいちゃん ○おばあちゃん
○父方の伯母さん ○父方の叔母さん
○母方の伯父（叔父）の妻 ○お兄さん
○お姉さん ○その他 ()
- 10 お父さんやお母さんがいないとき、あなたは寂しいですか？
○とても寂しい ○時々寂しい
○寂しくない、慣れた ○全然寂しくない
○その他 ()
- 11 あなたはどの程度の学歴を希望しますか？
○中学校 ○高校 ○大学
○大学院修士 ○大学院博士
- 12 あなたの家の経済状況はどうですか？
○とてもよい ○どちらかといえばよい
○ふつう ○どちらかといえば困難
○とても困難
- 13 現在あなたの学業成績はどうですか？
○とてもよい ○どちらかといえばよい
○ふつう ○どちらかといえば悪い
○とても悪い
- 14 学校の授業に困難な点がありますか？
○ある
(どんな点で？：)
○ない
- 15 将来あなたはどんな仕事に就きたいですか？それはなぜですか？

(職業：)

(理由：)

- 16 余暇時間は何をして過ごしていますか？
()
- 17 学校や地方政府が留守児童に対して何か特別な措置をとってくれるよう希望しますか？
○必要（どんな措置？：)
○必要なし

ありがとうございました。

本校で学ぶ 86 人の児童に質問票を配布し、回収率は 100% であった。この回収率の高さは授業時間及び課外時間に小学教師の実施協力があったことによる。授業中のため、筆者はそこに立ち会っていない。この点において、サンプルに協力教員による何らかの影響が反映されている可能性も予想している。また質問票の一部はその小学教師が担当する子どもたちのきょうだいに回答を依頼し自宅で回答したものである。

1【性別】

男子	37 人
女子	38 人

今回の調査でははからずも男女ほぼ同数であった。

2【年齢】

6 歳	4 人
7 歳	9 人
8 歳	15 人
9 歳	43 人
10 歳	14 人
12 歳	1 人

次項の学年と照合してみると気づくのだが、学齢と実際の学年が必ずしも一致しないのである。我々日本人からすると不自然な感じがするが、中国農村ではこのようなことがよくあるのである。また、単純に自分の年齢を正確に把握していなかったり、数え年で記入したりするケースもあるため、アンケートへの記入を誤った可能性もある。

3【学年】

2 年	12 人
3 年	2 人
4 年	69 人
5 年	2 人
中 1	1 人

4 年生が最も多いのはアンケート実施協力者である小学教員の担当するクラスが 4 年生であることによる。

4【家族の人数】

2 人家族	1 人
-------	-----

3人家族	7人
4人家族	30人
5人家族	11人
6人家族	20人
7人家族	9人
8人家族	4人
9人家族	1人
10人家族	2人
12人家族	1人

この質問項目の数値もやや正確さに欠けるところがある。いつもは一緒に住んでいない親戚をたまたま家族人数として認識しているケースがあるからである。しかし同時に回答を求めた家族構成を見ると「祖父母＋息子夫婦＋息子夫婦の子ども」という「直系家族」がほとんどであり、そこに親戚の単身者が同居しているケースも多く見られる。それが6人家族という構成に反映している。

5【兄弟姉妹の人数（本人を含め）】

一人っ子	3人
2人きょうだい	35人
3人きょうだい	27人
4人きょうだい	11人
5人きょうだい	7人
6人きょうだい	2人
7人きょうだい	1人

計画生育政策を実施している割には、一人っ子は非常に少ない。この点は山岳地と同様である。これが中国農村の現実なのである。

6【家族構成】

核家族	6人
直系家族	80人

質問4で述べたとおりである。今回の調査では複合家族はみられなかった。

7【2010年における両親の出稼ぎ状況】

両親ともに出稼ぎに行った	26人 (30.2%)
父親が出稼ぎに行った	26人 (30.2%)
母親が出稼ぎに行った	13人 (15.1%)
両親とも家にいた	20人 (23.4%)

本稿の核心的質問である。両親とも出稼ぎに出て家に親がいない状態になる子どもたちは3割程度であるが、親のどちらかが出稼ぎするケースも含めると、7割以上の子どもたちが留守児童ということになる。これがもし数年のスパンでみると出稼ぎ率はさらに高くなり、留守児童の割合も高くなるだろう。当地の人々はほとんどが外地での労働を経験するからである。ただ、本調査を実施した「鎮」は、ある程度の賑わいを備えた市街地であり、農業生産物を市場で販売して現金収入を得たり、地元で雇用されたりする者も相当数いるの

である。それが「両親とも家にいた」の23%という数字に表れている。

8【親の里帰りの頻度】

1か月に1回帰省する	21人
2～3か月に1回帰省する	21人
4～5か月に1回帰省する	10人
半年に1回帰省する	5人
7～9か月に1回帰省する	4人
1年に1回帰省する	17人
数年に1回帰省する	3人

今次調査では半年たたないうちに帰省する親が多かった。ここから考えるに、新化からあまり遠くない都市（例えば省内の長沙などすぐに帰省できる都市）に出稼ぎしている親が多いのではないかと推測できる。その実、地元における産業育成と雇用創出は中央政府の方針であり、それが早速数字に表れてきているということも考えられるのである。

9【両親不在時の監護者】（複数回答あり）

祖父（父方・母方含む）	40人
祖母（父方・母方含む）	51人
おじ（父の兄弟）	2人
おじ（母の兄弟）	4人
おば（父の姉妹）	8人
おば（母の姉妹）	5人
おば（父の兄の配偶者）	12人
おば（母の兄弟の妻）	3人
兄	5人
姉	10人
いとこ（父母の姉妹の娘）	2人
未回答	2人

予想通り、祖母及び祖父が留守児童の面倒を見ているケースが圧倒的に多かった。次いで「おば」が続くが、その「おば」の詳細な続柄を分析すると、「父の兄の配偶者」が最も多かった。一族における年長者が自らの面子において留守児童を引き取り、面倒を見ている構図が見て取れる。

10【両親不在時の気持ち】

とても寂しい	10人
時々寂しい	35人
あまり寂しくない、慣れた	27人
全く寂しくない	6人
未回答	0人

「とても寂しい」と「時々寂しい」を合わせると半数近くの児童が寂しさを感じていることになる。その一方で33人が寂しさを感じていないのは小学校中学年という年齢が関係しているほか、今や完全に普及し小中学生でも所持する携帯電話やインターネット等通信端末の普及が、離れて暮らす空白感を解消していること等が考えられる。

11【将来の学歴】

中学卒業	7人
高校卒業	5人
大学卒業	20人
大学院修士修了	7人
大学院博士修了	44人
無回答	3人

7割が大学卒業以上を希望しており、高学歴志向が顕著である。なかでも博士課程の修了を希望する児童が最も多かったのは驚いた。これは後の質問項目にある希望する職業と重ねると納得できるだろう。恐らく純粋な憧れや向上心が反映しているのだろうが、一方で、本アンケートの実施に協力してくれた小学教師の何らかの言説が影響している可能性も否定できない。

12【家計の状況】

とても良い	8人
比較的良い	20人
普通	50人
比較的困難	7人
非常に困難	1人

ほとんどの児童の家計が比較的良好である。先行き不透明な中国経済ではあるが、本調査を実施した2011年1月時点では出稼ぎの村民たちの仕事や経済実感は比較的良好であるようにみえる。

13【学習成績】

とても良い	4人
比較的良い	17人
普通	60人
比較的悪い	5人
非常に悪い	0人

児童のほとんどが自分の成績を平均以上であると認識している。ただ先生の指示のもと教室で一斉に記入していることを考えると、自身のプライドから、あるいは先生の面子を考慮して、このように解答している可能性も考えられる。なお、質問7・8・9との関連で、両親不在期間や監護者が誰であるかとの項目と成績との間に明確な相関は見られなかった。

14【学校の授業における困難】

有る	84人
無い	2人
無回答	0人

圧倒的多数の児童が「有る」と答え、その具体的記述には「図書館がない」、「テレビがない」、「マルチメディア機器や教室の不足」等、設備面での不満が記入されていた。こちらの意図したのは「学習についていけるかいけないか」を聞くものであったのだが、深読みされたかもしれない。アンケートを実施してくれた先生の解釈や意向や学校の考えが子どもたちに伝わり、子

どもたちがそれを書き込んだということも考えられる。また、この質問に関しては筆者による一連の参与観察がアンケート結果に反映した可能性もある。過去2年間、フィールドワークの途上で筆者が少額ではあるが教育現場に寄付をしてきたという知らせは、F氏サイドからこの先生にも伝わっているはずである。外国人による次なる援助への期待がアンケート結果に反映された可能性も排除できない。

15【将来の職業】

- 1) 教師 31人
- 2) 医師 30人
- 3) 科学者 10人
- 4) 警察官 5人
- 5) 工場労働者 3人
- 5) 農民 2人
- 7) 画家 1人
- 7) 党委書記 1人
- 7) アスリート 1人

教師と医師が双璧を成し、それに科学者が続いた。専門職への憧れと希求が非常に強く現れた。その理由は、教師については「子どもたちに知識と教養を与えたい」「人材を養成したい」とする理由がほとんどであり、医師については「傷病者の命を助けたい」とするものがほとんどであった。専門職に就くためには高等教育機関に進み高度な基礎教育及び職業教育を受ける必要がある。2節で検証した通り、これを実現する鍵は教育の格差是正であることは論を待たない。

16【余暇時間の過ごし方】（複数回答あり）

- 1) かけっこ 35人
- 2) 自転車乗り 24人
- 3) 縄跳び 22人
- 4) 山登り 19人
- 5) かくれんぼ 7人
- 6) 子をとろ子とろ、フラフープ 各4人
- 8) 玩具遊び、バドミントン、サッカー、電車遊び、ビリヤード、テレビ視聴 各2名
- 14) アイススケート、プロレス、スケボー、バスケットボール、高跳び、勉強をする、バレーボール、ままごと、ダンス、球技、水泳 各1人

平地の学校らしく、自転車遊びが挙げられているほか、サッカーやスケボー等、都会の子どもと変わらない遊びをしている子どももいる。

17【留守児童である自分に対する援助の要不要】

必要	86人
不要	0人

無回答	0人
-----	----

すべての子どもたちが「留守児童への特別な配慮が必要」と答えている。これについては判で押したように同じ回答が続いていたため、アンケートを実施してくれた先生が何らかの「模範解答」を子どもたちに与えたと考えられる。

3-3 山岳僻地小学校との比較の視点から

前稿（12年3月公刊）では山岳小学校における子どもたちの夢に関する小規模なアンケート調査の結果を開示し、その特徴を検証した。本稿では前項（2-2）で開示した鎮中心小学校における同種のアンケートを山岳地のそれと比較し、鎮中心部に学ぶ子どもたちの「夢」に関連する特徴を数点に絞って指摘したい。

第一に、自身のキャリアに関する夢について。中心小学では高学歴志向と専門職志向が顕著であることが指摘できる。この傾向は山岳地でもみられたが、ここではよりはっきりと現れている。就きたい職業の第一位に教師が挙げられていること自体、留守児童自らが教育の重要性を認識していることの証左であろう。

第二に、余暇の過ごし方について。さまざまな遊びを通じて子どもたちは自身の視野を広げ、社会性を身につけていく。その意味で遊びは子どもの将来にとって極めて重要なものである。中心小学校の子どもたちの遊びは山岳地の子どもに比べて、多種多彩であることが指摘できる。その理由は、①調査対象が3～4年生と前回の山岳地小学校の子どもたちよりも大きく、より活発な遊びができること、②かなりの賑わいを持つ鎮中心地に建つ大規模で設備のある程度整った小学校であるだけに、遊び場や遊具の種類も山岳地に比べると多いこと、③鎮中心にはある程度裕福な家庭の子どもも一定数いること、等が考えられるだろう。しかし山地も平地も総じて健康的で子どもらしい過ごし方をしている印象を受ける。

4 留守児童の夢に地元社会はどのように寄り添っているのか

4-1 夏休み等長期休暇時における児童ケアの必要性

このような留守児童の夢に、地元社会（労働力の供給源としての新化县）はどのように寄り添っているのだろうか。その実、受け入れ先の都市（浙江省義烏市）における同様の問題に関しては前稿において事例紹介したところである。しかし地元社会における取り組みについてはこれまで十分に検証することができなかつ

たためより一層の事例検証の蓄積が必要である。

まず、筆者がフィールドワークを行ってきた新化县において、地元社会が留守児童をどのように認識しているのかみていこう。そもそも、新化县は湖南省の人口集中地域であり、労働力供給の中心地なのである。現在県外に流出している人口は23万人、留守児童の数は10万人を数えるとされる⁶⁾。

つまり現地社会では留守児童及び両親不在の家庭はごく当たり前の存在なのである。にもかかわらず、それは大きな問題をはらんだ存在とされて認識されている。それは毎日学校に通い規則正しい生活を送る平時よりも、自由行動の時間が増える夏休み等長期休暇時にクローズアップされるのである。

8月初旬の地元の新聞に「婁底市新化县中学生5名が水遊びで亡くなる——ほとんどが留守児童」という見出しの記事が掲載された。事件の概要を資料として提示しよう。

【資料5】

8月1日の午後、新化县W鎮で惨劇が起きた。5名の小学2年生の児童が連れ立ってC貯水池で水遊びをしていて全員が溺れて死亡した。目撃したLさんによれば、当日の15時20分頃、貯水池の岸を通りがかったとき、何名かの児童が水遊びをしてはしゃいでいたのを見かけた。「その時、子どもたちに安全に気をつけるようにと言ったのです」。15分ほどして、Lさんがそこに戻ってきたときには、岸辺に服が置いてあるものの、児童の姿は見当たらなかったため、大声で助けを求めた。15時45分頃、泳ぎの達者な数名の村民が池に入り、溺れた5名の児童を救い上げた。

村の幹部によれば、この貯水池は総容量1.275億立方メートルで、農業灌漑を主として発電・洪水防止及び養殖等総合的機能を備えた大型水利施設である。これまでも何度も水難事故が起こっている。

現場で捜査を見守っていた村民によれば、亡くなった子どもたちは貯水池近くの村に住んでおり、ほとんどが留守児童であるという。「悲しいのを無理に我慢して、嘘をついて、ようやく（出稼ぎに出ている）妻を呼び戻しました。」事故に遭った一人の子どもの父親は涙を拭いながら言った。「息子がこんなことで亡くなるなんて、彼女は夢にも思わなかった」

目下、新化县の中国共産党一級委員会及び県政府は専門のワーキングチームを立ち上げ、事件の処理をさらに進めているところである⁷⁾

常識的に考えれば世の親は、まだ幼い小学2年のわが子が同級生の子ども同士で貯水池に泳ぎに行くこと

など許可しないだろう。それは日本のみならず、中国の親でも同様であると思われる。しかしこの子どもたちは友人グループだけで泳ぎに行ってしまった。ここに留守児童家庭の子どもに対する監護能力が問われることになるのである。タイトルも含め注意深く読むと、ここには水難事故と留守児童・留守家庭の問題を関連付けようとする「意図」も感じられるのである。この種の事故は、確かに親の監督不行き届きが一因とされるケースも多いが、本来は留守児童であるか否かという問題とは関係性が薄いと考えられる。しかしこの文脈では留守児童であることが強調されているのであり、ここに注意が必要である。

つまりこのように結びつけることで留守児童及び留守家庭に対する社会一般の眼差しは形成・固定化されるのであり、学校の授業から解放され、先生や保護者の目が行き届かなくなる夏休み期間における留守児童のケアの必要性が叫ばれるのである。なお、今一つの長期休暇である春節（中国正月）の休みにおいては、出稼ぎ先から両親が帰ってくる家庭が多く、寒い季節のため屋外で長時間遊ぶことも少なくなるため、リスクも減少する。

4-2 経済先進都市のボランティア団体による支援

ではこのように監護がゆきとどかない子どもたちとして認識される留守児童たちを、新化県ではどのような方法でケアしようとしているのであろうか。その答えのヒントが、本論冒頭の智慧ちゃん歌にもある。この問いに十全に答えるためには、地元政府や社会人士主導が主導する支援活動を検証する必要があるのはもちろんのこと、外地より参入するボランティア団体の活動に注目することが重要である。その実、内陸貧困地区における支援でもっとも特徴的と言えるのが、沿海部経済先進都市に拠点を置く支援団体のボランティア受け入れなのである。以下、地方政府のウェブサイトにはアップされている記事を読み解く中からその事例を検証していく。

4-2-1 広州発「楽善助学促进会」の取り組みと受け入れ

第一に挙げたいのが、広州が本拠地の「楽善助学促进会」の取り組みである。2012年5月26日から27日にかけて、より多くの子どもの支援を行うことを目的として、広州市楽善助学促進会が新化市を訪れ、100名の子どもたちの貧困状況を調査した。この調査活動には広州市、長沙市（湖南省の省都）や地元の新化市から計20名以上が参加した。この団体は2004年5月1日に成立した専門的な奨学ボランティア団体

であるとともに、非営利的な奨学ボランティア慈善組織であり、活動参加の自主性を原則としており、常時8,000名以上の会員と、200名のボランティアが奨学活動を行っている。目下、広東、江西、甘肅、湖南、河北、四川、貴州等7省40以上の県・市において公益奨学活動を行っており、貧困状況にある高校生や大学生への募金による援助、勉強机の寄贈、図書室やパソコンルームの寄贈、校舎の修繕等、奨学プロジェクトを展開している。この団体は2010年に新化県で奨学活動を実施し、すでに111名の貧困状態にある高校生を支援し、寄付して援助した学費は41万円に上る。また寄付した図書は7,756冊、授業机1,400脚で、その総額は23万余元である⁸⁾。

4-2-2 深圳発「募師支教」の取り組みと受け入れ

2012年8月31日、深圳から来た「募師支教」（教師を募り教育をサポートする）プロジェクトのボランティア10名が、深圳「募師支教愛心聯盟」責任者であり深圳華宮公司の会長である許凌峰氏の引率のもと、新化県を訪れた。党県委員会及び県政府は本プロジェクトのボランティアのために盛大な歓迎式典を開催している。式典には県委員会常務委員、宣伝部長、県教育局長、県委員会弁公室副主任、県政府弁公室教育衛生組長等、県の党及び政府組織の指導者が列席したのである。

許凌峰氏は深圳市の青年企業家で、「中国における募師支教活動の第一人者」、「中国におけるフィランソピーの星」と称される人物である。彼の提唱する「募師支教」行動はすでに全国における貧困家庭の援助・教育支援のブランドとなっており、一貫するのは「改革開放の恩恵に感謝し、全国人民に恩返しする」慈善事業である点、教育事業に対する支援である点、貧困地区に対する思いやりである点である。

新化県で教育支援を行う10名の志願者は深圳、江西、湖南等7の省・市から参集し、ボランティア申請を通じて「募師支教」行動に参加している。彼らはそれぞれ県内のC鎮J中学、Z鎮Z中学、B鎮中心中学に配属された。（ここには筆者がフィールドワークを行った地域及び学校の中学部も含まれている。）

式典においては県教育局長が新化県教育の基本的状況を紹介したのに続き、ボランティアがそれぞれ自己紹介している。許凌峰氏は党県委員会及び県政府の熱烈な歓迎に感謝し、志願者が新化県の人々の自力更生や刻苦創業の精神に学び、すべての困難を克服し、貧困地域の教育事業の発展に貢献するよう希望した。これに対し県政府常務委員で宣伝部長の李勁柳氏は、党

県委員会及び県政府を代表し、遠くからはるばる新化県を訪れ教育支援をすることに対して謝意を表明し、志願者の参入が受け入れ校に新鮮な力量を注入し、受け入れ校に先進的な教育理念をもたらし、貧困地域の教育事業の発展を促進することができるよう希望した⁹⁾。

本論の趣旨からすれば、外部からの若いボランティア教師の受け入れが教育現場にどのような影響を与えたのか、とりわけ留守児童たちとの間でどのようなインタラクションが実現し子どもたちを陶冶できたかについて明らかにされなければならない。しかし残念ながら現時点でその教育実践記録やそのレポート、評価等は入手できていない。今後の継続的なフィールドワークにより検証していきたいと考える。

4-3 鄧小平「先富論」の主戦場としての新化県

新化県の留守児童支援及び貧困児童支援の特徴を端的に述べる時、今更ながらではあるが、次の有名な理論が想起される。

「我們的政策是讓一部分人、一部分地区先富起来、以帶動和幫助落伍的地区、先進地区幫助落伍地区是一個義務¹⁰⁾。」（我々の政策は一部の人、一部の地域を先に富裕にさせ、そして遅れた地域を率先し助けるものである。先進地域が遅れた地域を助けるのは義務なのである。）

これは「改革開放の父」と人々から敬愛される鄧小平が述べた「先富論」である。「先富論」とは「先に豊かになれる地域と人から豊かになろう」という政策である。この政策が歴代政権に30年来継承され大々的に推進された結果、確かに豊かになった人や地域は拡大した。ところが一方で経済格差が拡大するなどの矛盾が拡大してきた。このままでは現実を変革するのは困難である。

しかし「先富論」には後半部分がある。すなわち、先に豊かになった人や地域は、まだ富裕への途上にある人を支援し、「全体的な富裕」の実現に協力せよ、という考え方である。この思考は経済的に立ち遅れた農村地域に対する様々な分野の支援となって顕現している。現在中国では医療改革、社会保障の充実化、都市化推進、新農村建設等、具体的政策支援が推し進められているが、とりわけ近年の傾向として企業・団体による社会貢献やNGOの活動が盛んになっていることが指摘できる。とりわけ大企業の経営者が慈善事業に大きな金額を寄付するたびにマスメディアで大きく報道されているのである。

つまり国や企業、そして個人のレベルで「先富論」

の後半部分が競って実践されているのが現在の中国社会なのである。筆者がフィールド地を選んだ新化県は、経済的に発展途上の地であり、まさに鄧小平「先富論」導入の主戦場であるとも言っても過言ではないのである。

5. おわりに

最後に本稿で明らかにしたことをまとめ、若干の考察をしてみよう。

都市中間層～富裕層の家庭では常に両親が傍らにおり、子どもはその監護や教導を受け、安心して日常を過ごすことができる。しかし農村部とりわけ貧困農村の子どもたちはその当たり前の日常を享受できないのである。ここがまず教育格差の発端である。「はじめに」における「智慧ちゃん」の歌は、親が家にいない留守児童にとって親代わりになる学校教員の存在の大きさと重要性を示唆しているのである。

第2節において中央政府は国内にある格差の諸相をしつかりと認識し、経済格差から生じる教育格差の是正に前年にも増して取り組み、その成果をPRしていた。当然そこでは留守児童や貧困家庭の子どもの人生の可能性を応援することも主要課題の一つとなる。

ところで第3節で明らかとなった子どもたちの夢や希望は、家庭教育の充実なしには達成が難しいものでもあるはずだ。まさに教育格差の原因の一つは「親による教育力」の有無なのである。しかし留守児童にとっては親代わりとなる学校教員の存在と役割は非常に大きなものとなる。しかし貧困県においては人材や物品等にかかる教育関連予算が潤沢ではない。そこで教育格差解消の方策として期待されるのが、先進地域からの寄付や費用負担による教育支援やボランティアの受け入れなのである。その意味で、筆者がフィールドワークの地として選定した新化県における留守児童対策は、鄧小平「先富論」に発する方法論の最前線地域ということできるのである。

謝辞

本稿は文部科学省科学研究費補助金を受けた研究テーマ「中国農村における留守児童と教育格差に関する研究」（挑戦的萌芽研究：21653095）の取り組みの一つである中国内陸部農村及び沿海都市へのフィールドワークで得た資料をもとに執筆したものである。そもそもこの現地調査は本研究助成及び現地協力者の貢

献がなければ実現不可能であった。関係各位に心から御礼申し上げる。（諸事情を考慮し本稿において実名を記載するのを差し控える）また諸般の事情により、本稿の発表が1年遅れたことをお詫び申しあげる。

註

1) 「中国の留守児童と出稼ぎ労働者 - フィールドワーク1年目の総括」『九州保健福祉大学研究紀要』第12号、2011年3月、57-68頁、及び「中国農村における留守児童の夢と社会的支援に関する一考察 - フィールドワーク2年目の総括」『九州保健福祉大学研究紀要』第13号、2012年3月、35-46頁、を参照のこと。

2) 当該楽曲については、中国中央电视台网站「爱西柚」
<http://xiyou.cntv.cn/v-d1828cd2-a5be-11e1-89a1-001e0bd5b3ca.html> (2013年9月4日アクセス)

及び、人民博客

<http://vblog.people.com.cn/html/ItemId79/2012-05-25/77547.html> (2013年9月4日アクセス)

等、動画サイトで視聴可能。

3) 温家宝『政府工作报告—2012年3月5日在第十一届全国人民代表大会第五次会议上』人民出版社、2012年03月。

4) 温家宝『政府工作报告—2013年3月5日在第十二届全国人民代表大会第五次会议上』、新华网 (2013年3月18日报道)

http://news.xinhuanet.com/2013lh/2013-03/18/c_115064553.htm (2013年9月3日アクセス)

5) 生涯学習政策局調査企画課「教育指標の国際比較」平成25年版、平成25年3月。文部科学省ウェブサイト
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/kokusai/1332512.htm (2013年9月3日アクセス)

6) 潭江平「关爱留守儿童——从心灵开始」新化县人民政府网、2013年6月25日

<http://www.xinhua.gov.cn/zwgk/ShowArticle.asp?ArticleID=8655> (2013年9月6日アクセス)

7) 「娄底新化县5中学生结伴游泳溺亡——大多是留守儿童」湖南频道、2013年8月3日

<http://hn.rednet.cn/c/2013/08/03/3100420.htm> (2013年9月5日アクセス)

8) 「广州市乐善助学促进会志愿者和爱心人士访查新化贫困学生」新化市人民政府网、2012年5月18日

<http://www.xinhua.gov.cn/zwgk/ShowArticle.asp?ArticleID=3974> (2013年9月10日アクセス)

9) 「深圳“募师支教”志愿者来新支教」新化市人民政府网、2012年9月3日

<http://www.xinhua.gov.cn/zwgk/ShowArticle.asp?ArticleID=5057> (2013年9月10日アクセス)

10) 邓小平『邓小平文选』人民出版社、1993年、155頁。